

# 第2次千葉県有機農業推進計画

平成27年1月

千葉県

# 目 次

<b>I 計画策定の趣旨</b>	1
1 計画策定の趣旨	
2 計画の位置付け	
3 計画期間	
<b>II 有機農業の現状と課題</b>	2
1 有機農業をめぐる情勢	
2 千葉県における有機農業の現状と課題	
<b>III 有機農業の推進・普及目標</b>	9
<b>IV 有機農業の推進方向と施策</b>	10
1 有機農業者等の支援	
2 有機農業に関する技術の開発・普及	
3 有機農業に関する消費者・実需者等の理解の醸成	
4 有機農業の推進のための体制づくり	
<b>V その他必要な事項</b>	14
1 調査の実施	
2 有機農業者等の意見の反映	
<b>参考 データ編</b>	15
<b>参考 資料編</b>	19

# I 計画策定の趣旨

---

## 1 計画策定の趣旨

農業における生産活動は、食料を生産する基本的な役割のほか、自然環境の保全などの公益的機能も併せ持っていることから、これをさらに発揮させていくためには、農業全体をより一層環境と調和した農業へ転換し、持続的かつ安定的なものとしていくことが、重要となっています。

このような中で、本県では、土づくりを行うとともに化学肥料・化学合成農薬を通常の2分の1以下に低減した「ちばエコ農業」<sup>a</sup>や持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律（平成11年法律第110号）に基づく「エコファーマー」<sup>b</sup>の認定等、「環境にやさしい農業」の推進に取り組んでいるところです。

有機農業<sup>c</sup>については、化学肥料・化学合成農薬を使用せず、農業生産に由来する環境への負荷を低減し、農業の自然循環機能を増進するものであることから、本県では、平成22年2月に「千葉県有機農業推進計画」を策定し、「ちばエコ農業」や「エコファーマー」とともに「環境にやさしい農業」の一形態として推進を図ってきました。

本計画が平成26年度に終期を迎えることから、これまでの取組状況、本県農業をめぐる情勢の変化、有機農業の実態等を踏まえて課題を整理し、新たに有機農業の拡大などの数値目標を設定し、目標の達成に向けた施策を総合的に推進するため、「第2次千葉県有機農業推進計画」（以下「推進計画」という。）を策定することとしました。

## 2 計画の位置付け

本推進計画は、有機農業の推進に関する法律（平成18年法律第112号。以下「有機農業推進法」という。）第7条に規定される都道府県計画として位置付けるとともに、平成26年4月に国が公表した「有機農業の推進に関する基本的な方針」（以下「基本方針」という。）に即して策定するものです。

---

<sup>a</sup> 通常と比べて化学合成農薬と化学肥料を2分の1以上減らした栽培を行う産地の指定やこれらの産地などで栽培された農産物について、県独自の認証を行う制度。

<sup>b</sup> 土づくり、減化学肥料、減化学合成農薬栽培の計画を作成し、県知事から認定を受けた農業者（個人又は法人）のこと。

<sup>c</sup> 化学的に合成された肥料及び農薬を使用しないこと並びに遺伝子組換え技術を利用しないことを基本として、農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減した農業生産の方法を用いて行われる農業。

また、推進に当たっては、有機農業に取り組む農業者（以下「有機農業者」という。）等の自主性を尊重するとともに、平成25年12月に策定した「千葉県農林水産業振興計画」や関連方針等と整合性を図りながら、取り組むこととします。

### 3 計画期間

この推進計画の計画期間は、平成27年度からおおむね5年間とします。

なお、情勢の変化に的確に対応するため、必要に応じて適宜見直しを行うこととします。

## II 有機農業の現状と課題

---

### 1 有機農業をめぐる情勢

#### (1) 千葉県農業を取り巻く状況

本県は、温暖な気候と豊かな大地に恵まれ、年間を通じて多種多様な農産物が生産されるとともに、首都圏に位置し、食料の安定供給という面でも大きな役割を果たしています。

一方、農業を取り巻く環境は、国際化の進展、消費形態の変化と産地間競争の激化、生産環境の悪化、農業者の減少と高齢化の進展など、急激かつ大きく変化しており、さらに、農地の減少や耕作放棄地の拡大、有害鳥獣による被害の増加など、解決すべき様々な課題があります。

このような状況に加えて、近年、燃油高騰、輸入肥料・飼料等の価格の高止まり、農産物の価格低迷などにより、農業者の所得が減少し、生産意欲の減退を招いており、所得向上に向けた取組が急務となっています。

また、食や健康に対する消費者の意識が高まる中、輸入食品の農薬問題、食品の偽装表示など食の安全性・信頼性をゆるがす様々な問題が生じ、更には東京電力(株)福島第一原子力発電所事故による放射性物質拡散の影響もあり、食の安全・安心への更なる取組が求められています。

#### (2) 「環境にやさしい農業」の取組状況

本県では、農業の持続的発展、地域資源の活用、農業者と消費者の提携を基本方向として、生産性の向上を図りつつ環境への負荷を少なくし、消費者の求める新鮮で安全な農産物を供給する環境保全型農業を推進するため、

平成6年に「環境にやさしい農業推進基本方針」を策定し、「ちばエコ農業」や「エコファーマー」の推進に取り組んでいます。

「環境にやさしい農業」の取組状況を、「ちばエコ農業」の取組農家数と「エコファーマー」の認定数からみると、総農家数が減少する中、ここ数年横ばい又は減少傾向にあります。

「ちばエコ農産物」の栽培状況では、平成26年3月末現在で延べ5,153戸、4,290ヘクタールとなっており、5年前と比較すると、取組農家数は減少していますが、面積はほぼ横ばいとなっています。品目別では水稲が全体の約50%を占め、次いで野菜（ダイコン、ニンジン、キャベツなど58品目）となっています。

また、「エコファーマー」の平成26年3月末現在の認定数は、2,493戸となっており、5年前と比較すると減少しています。

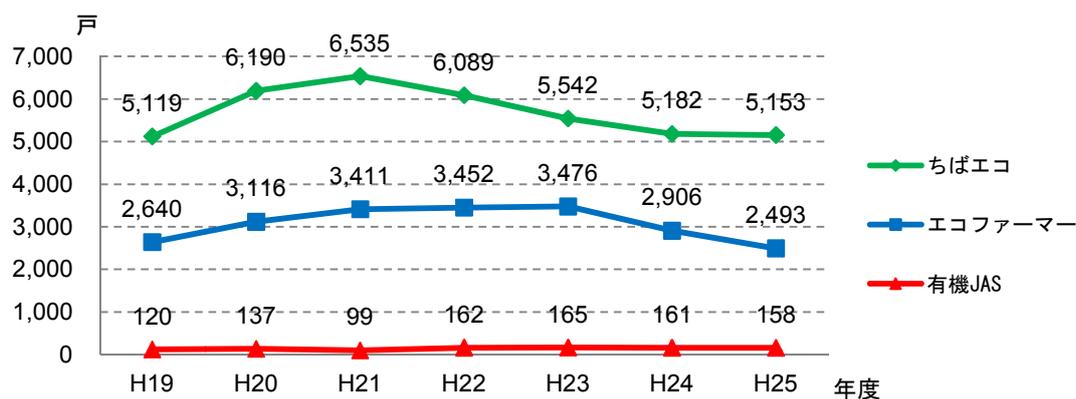


図1 「環境にやさしい農業」に取り組む農家数の推移  
(ちばエコは延べ件数)

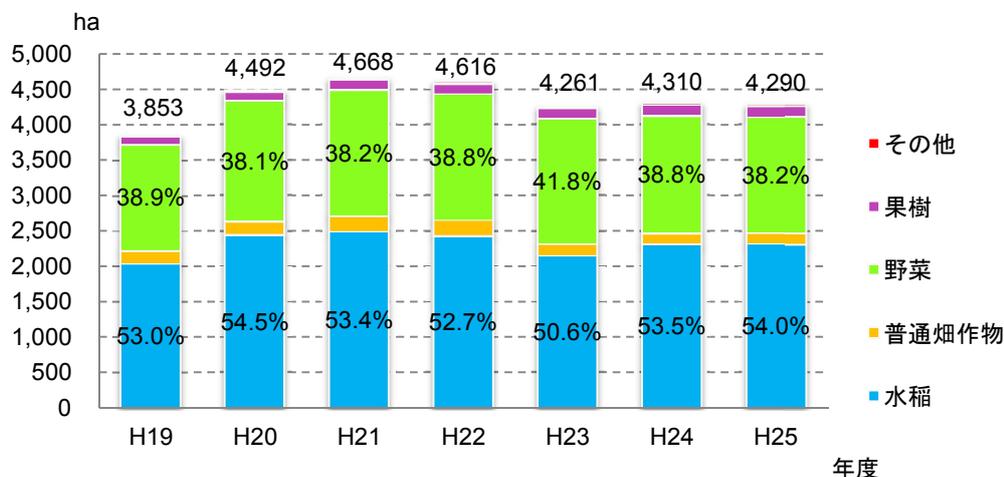


図2 ちばエコ農産物栽培面積の推移

## 2 千葉県における有機農業の現状と課題

### (1) 千葉県における有機農業の現状

#### ア 有機農業の取組農家数と面積

本県における有機農業の取組状況については、農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律（昭和25年法律第175号。以下「JAS法」という。）に基づく認定を受けている（以下「有機JAS認定」という。）農家数が、平成26年3月末現在で158戸となっています。

また、有機JAS認定を取得せずに有機農業に取り組んでいる農家数は258戸、栽培面積は320ヘクタールと推計され、有機JAS認定と合わせると現在約420戸、720ヘクタール程度となっており、本県の耕地面積に占める有機農業の面積割合は、全国の割合と比較して高くなっています。

ここ数年は、平成23年に発生した東日本大震災に伴う東京電力（株）福島第一原子力発電所事故による放射性物質拡散の影響から、堆肥などの生産資材の確保が困難となったことや、風評被害により消費者の買い控えがおき、販売額が落ち込んだこと等から取組の停滞が見られましたが、最近は回復傾向にあります。

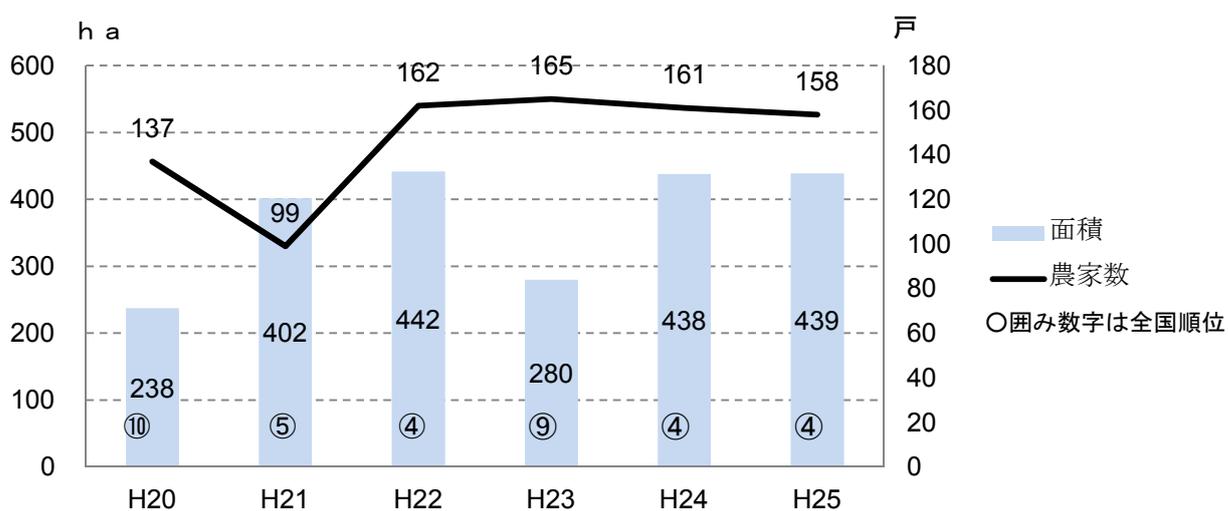


図3 千葉県の有機JAS認定の推移

(農林水産省消費・安全局 表示・規格課調べ)

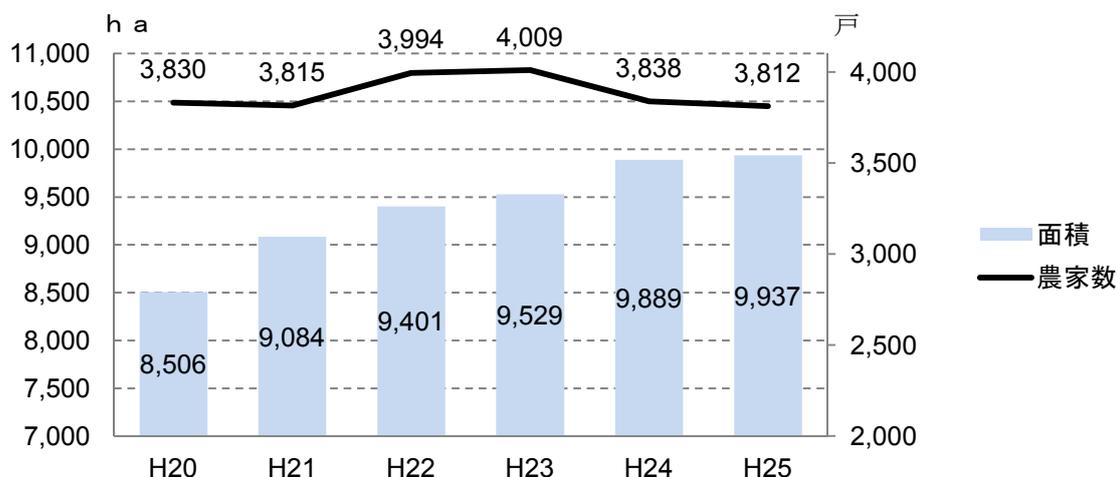


図4 全国の有機JAS認定の推移

(農林水産省消費・安全局 表示・規格課調べ)

表1 有機農業の農家数の推計

項目		千葉県	全国
有機農家数		420戸 (0.6%)	11,859戸 (0.5%)
内訳	有機JAS認定	162戸 (0.2%)	3,994戸 (0.2%)
	有機JAS認定以外	258戸 (0.4%)	7,865戸 (0.3%)
総農家数		73,716戸	2,527,948戸

平成22年度有機農業基礎データ作成事業報告書(農林水産省補助事業)  
 農林水産省消費・安全局 表示・規格課調べ(平成23年3月31日時点)  
 2010年世界農林業センサス  
 ( )内は総農家数に占める有機農業の農家数の割合

表2 有機農業の面積の推計

項目		千葉県	全国
有機農業面積		722ha (0.6%)	16,374ha (0.4%)
内訳	有機JAS認定	402ha (0.3%)	9,084ha (0.2%)
	有機JAS認定以外	320ha (0.3%)	7,290ha (0.2%)
耕地面積		129,400ha	4,609,000ha

平成22年度有機農業基礎データ作成事業報告書(農林水産省補助事業)  
 農林水産省消費・安全局 表示・規格課調べ(平成22年4月1日時点)  
 平成21年耕地及び作付面積統計  
 ( )内は耕地面積に占める有機農業の面積の割合

## イ 地域別の取組状況

地域別の環境保全型農業直接支援対策<sup>d</sup>における有機農業の申請農家数は、印旛地域が最も多く、次いで山武地域、香取地域、安房地域となっています。これらの地域では、法人化やグループ化が進んでいることが特徴です。

## ウ 生産・経営の状況

平成25年度に実施した「県内の有機農業に関する実態調査（以下「県実態調査」という。）によると、品目別では、野菜が最も多く、1戸当たりの平均栽培品目数が26品目と少量多品目栽培が中心となっていますが、水稻や葉物野菜など単一品目で大規模化している経営もみられます。

## エ 農業者等の意向

新規就農希望者のうち有機農業を志向する者が毎年一定割合存在することや、取引先からのニーズに対応するため「ちばエコ農業」等から有機農業に転換する農業者や更に規模を拡大したいという意向の有機農業者も存在することから、今後は有機農業の拡大が見込まれます。

## (2) 千葉県における有機農業の課題

有機農業については、条件を整えば取り組みたいと考えている農業者はいるものの、安定した収量・品質が確保できる技術の確立・体系化や、労働力の確保、生産コストに見合う価格で取引できる販路の確保など様々な課題があります。

### ア 生産・経営上の課題

#### (7) 栽培技術

県実態調査によると、栽培技術については、「技術が確立し、生産量は安定」との回答が18%、「技術がほぼ確立し、生産量は概ね安定」との回答が46%と、合わせて64%となっていますが、「技術が未確立で、生産量は不安定」（32%）「技術が未確立で、生産量は確保できない」（4%）との回答も合わせて36%となっております。その要因の多くが、雑草や病害虫防除対策の課題です。

---

<sup>d</sup> 地球温暖化防止や生物多様性保全に効果の高い営農活動に取り組む農業者に対して、交付金を交付する制度。

技術の習得先は、「有機農業者同士の情報交換」や「自らの経験」との回答がそれぞれ68%、63%となっています。

有機農業は個人での取組が多く、点在しているため、技術の習得や販売情報などを得る機会が不足しており、様々な課題の解決が難しい状況にあります。

また、土づくりや除草対策、病虫害防除対策などは、農業者個々の経験に基づく創意工夫により取り組まれており、普及に移せる技術の体系化や指導体制が十分とは言えない状況です。

#### (4) 経営

県実態調査によると、経営状況については、「安定している」（13%）、「概ね安定している」（42%）との回答が合わせて55%となっていますが、「やや不安定」（30%）「経営がなり立たない」（12%）との回答も42%あります。その要因の多くが、労働力の確保、販路の確保、コスト低減などの課題です。

また、有機農業以外の農地と隣接した場所で取り組む場合は、病虫害や雑草の発生抑制対策や隣接は場からの農薬の飛散防止対策など、周辺の農業者との調整や地域の理解を得ることが重要です。

### イ 消費・流通・販売上の課題

#### (7) 消費者の理解

平成25年度に実施した「県政に関する世論調査」では、有機農業により生産される農産物に対するイメージについては、「安全・安心な農産物」が68%と最も高くなっており、以下、「価格が高い」（55%）、「健康に良い」（45%）、「環境にやさしい農産物」（45%）と続いています。

また、有機農業により生産される農産物の購入理由としては、「安全・安心だと思ふから」が78%と最も高く、以下「健康に良さそうと思ふから」（48%）、「生産者がわかることが多いから」（44%）と続いており、「安全・安心だから」との回答が5年前より10%以上減少している一方「生産者がわかることが多いから」との回答が5年前の27%から増加しています。

有機農業により生産される農産物の取引の多くが、消費者との信頼関係による直接取引を主体としていますが、消費者の購買意欲を高めるためには、「生産情報の公開」など、より一層の情報の受発信が必要です。

#### (イ) 流通・販売の実態

平成24年3月にNPO法人日本有機農業研究会が実施した「有機農産物の流通拡大のための実態調査報告」によると、スーパーなどの量販店が取扱っている、有機農業により生産される農産物で最も多い品目は野菜であり、その87%が有機JAS認定を受けた農産物<sup>°</sup>となっています。

一方、本県の有機JAS認定の取得状況をみると、事務が複雑なことや費用がかかることなどからここ数年取得者は増えていません。

今後は、流通・販売業者への有機農業に対する理解の増進を図るとともに、規模拡大に伴い販路を拡大しようとする農業者については、有機JAS認定の取得を進める必要があります。

---

<sup>°</sup> 「有機農産物」と表示して販売するためには、国が認めた登録機関による有機JAS認定を取得する必要がある。認定を受けた農産物には有機JASマークを貼付して販売することが義務づけられている。

### Ⅲ 有機農業の推進・普及目標

---

#### 1 有機農業の拡大

本県の耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合は現在0.6%程度と見込まれ、おおむね平成31年度までに1%まで拡大させることを目指します。

#### 2 有機農業に関する技術の開発・体系化

有機農業に新たに取り組む農業者などの支援のため、水稻や野菜など本県の主要な品目について、安定的な品質・収量を確保できる有機農業の技術の開発・体系化を図ります。

#### 3 有機農業に関する普及指導の強化

引き続き、県の指導機関に有機農業の担当職員を配置するとともに、先進的な有機農業者との連携を強化することなどにより指導体制の充実を図ります。

#### 4 有機農業に対する消費者の理解の増進

有機農業が「環境にやさしい農業」の一つであることを理解する消費者の割合について、現状45%をおおむね平成31年度までに50%以上にすることを目指します。

#### 5 推進体制の強化

有機農業者や有機農業の推進に取り組む民間団体をはじめ、流通業者、実需者、消費者、農業団体等で構成する推進組織を整備します。

市町村においては、各地域の有機農業の状況を踏まえ、就農相談に対応できる窓口を設置するなど、推進体制の整備率について、現状74%をおおむね平成31年度までに100%にすることを目指します。

## IV 有機農業の推進方向と施策

### 1 有機農業者等の支援

#### <推進方向>

有機農業を拡大していくためには、有機農業が抱える生産面・経営面の課題を解決し、有機農業への新規参入、「ちばエコ農業」等からの転換やすでに取り組んでいる農業者の規模拡大などの取組を推進していく必要があります。

そこで、それぞれの取組状況に応じて、各種課題の解決が図られるよう有機農業者同士のネットワーク化を進めるとともに、先進的な有機農業者と連携した研修機会の拡大や相談体制の整備、各種支援のための施策の活用促進などに取り組んでいきます。

#### <推進施策>

#### (1) 有機農業への段階的な取組支援

ア 有機農業に関する知識や技術を習得するための研修会等の開催や、農業者相互の情報交換の機会を設けるとともに、各種課題の解決が図られるよう有機農業者同士のネットワーク化を進めます。

イ 取組開始時の経営リスクを軽減するため、先進的な有機農業者の取組事例を調査し、実践している先進技術や経営を紹介することなどにより「ちばエコ農業」等から一部を有機農業へ転換するなど段階的な取組を推進します。

ウ 土づくりや化学肥料・化学合成農薬を低減する技術の導入に係る初期投資の負担を軽減するため、有機農業を支援対象とした環境保全型農業直接支援対策や各種支援制度の活用を進めます。

#### (2) 新規就農者への支援

ア 新規就農希望者が有機農業を志向する場合には、県農業大学校等において基本的な技術、知識について学ぶ機会を提供するとともに、先進的な有機農業者の下で栽培技術や経営のノウハウを習得できるよう有機農業者との連携を強化していきます。

イ 有機農業への新規参入を円滑に進めるため、研修受入れ可能な先進農家を増やすとともに、リスト化するなど情報を整理し、県行政機関、県農業大学校、

新規就農相談センター、農地中間管理機構<sup>f</sup>、市町村、農協等関係機関が連携して相談を受け、青年就農者確保・育成給付金<sup>g</sup>や各種支援の活用が促進されるよう情報提供に努めます。

ウ 有機農業に関する研修会の開催などにより市町村や農協等の理解促進に努めます。

## 2 有機農業に関する技術の開発・普及

### <推進方向>

有機農業を拡大するためには、栽培技術上の様々な課題を解決し、安定的な品質・収量の確保や経営的なリスクの軽減を図る必要があります。

そこで、これまで開発された技術や県内外で先進的に取り組まれている技術について科学的な評価を進めるとともに、現地での実証を行うなど、有機農業の安定生産に向けた技術の開発・普及に取り組んでいきます。

### <推進施策>

- (1) 有機農業の初期の経営安定に資するよう研究課題を設定し、研究開発に取り組むとともに、有機農業者等が必要とする技術を的確に把握し、研究開発に反映させるよう努めます。
- (2) 国、県、有機農業者、民間団体等で開発された技術を組み合わせ、現地での実証を行うなど、有機農業の安定生産に向けた技術の開発・普及に努めます。
- (3) 家畜ふん堆肥や稲わら堆肥等、地域の有機質資源の利活用が促進されるよう情報提供に努めます。
- (4) 国、県、有機農業者、民間団体等により研究、開発、実践されている様々な技術の調査結果や成果等の情報を積極的に収集し情報発信に努めます。

<sup>f</sup> 農地を借り受け、保全管理し、まとまりのある形で担い手に貸し付ける農地中間管理事業を行う農地の中間的受け皿となる組織。本県では、平成26年4月に公益社団法人千葉県園芸協会を機構に指定。

<sup>g</sup> 45歳未満で就農を予定している者及び新規就農者に対し、給付金を支給する制度。県農業大学校や先進農家などの指定研修機関で研修を受ける就農予定者に対し給付金を支給する準備型と、市町村が作成する「人・農地プラン」への位置付けや、認定新規就農者になる等の要件を満たした独立・自営就農者に対し支給する経営開始型がある。

(5) 普及指導員や農協営農指導員等を対象とした研修会の開催や国等が開催する研修会へ職員を派遣することにより、指導者の資質向上に努めます。

### 3 有機農業に関する消費者・実需者等の理解の醸成

#### <推進方向>

有機農業を拡大するためには、有機農業者と消費者、流通業者、実需者等との相互理解を促進することが必要です。

そこで、地域での食育、地産地消、農業体験学習等の取組を促進するとともに、有機農業者と消費者・実需者等との交流、情報交換の機会を設けるなどニーズの把握や需要拡大に努めます。

#### <推進施策>

##### (1) 有機農業者と消費者等の相互理解の促進

ア 県が主催する各種イベントを活用し、消費者をはじめ流通業者、実需者等に対し、有機農業の有する自然循環機能の増進、環境への負荷の軽減、生物多様性の保全等の様々な機能について、知識の普及啓発に努めます。

イ 家庭、学校、地域など様々な場面で行われる食育活動や有機農業者と消費者との交流活動など、消費者と有機農業者とが互いに理解を深める取組を推進します。

ウ JAS法に基づく有機農産物の検査認証制度や特別栽培農産物に係る表示ガイドライン<sup>h</sup>に基づく農産物の表示ルール等について、登録認定機関と連携して消費者等への周知に努めます。



<sup>h</sup> 化学合成された農薬や肥料を減らして栽培した農産物について、消費者がこれらの農産物を購入する際の目安となるよう、生産、流通、販売に携わる人たちが守るべき生産や表示の一定の基準を農林水産省が定めたもの。「特別栽培農産物に係る表示ガイドライン」に従って生産された、地域の慣行レベル（各都道府県が定める）に比べて、節減対象農薬の使用回数が5割以下、化学肥料の窒素成分量が5割以下で栽培された農産物を特別栽培農産物という。

## (2) 販路の拡大に向けた支援

- ア 有機JAS認定の制度に関する情報収集・発信に努めるとともに、国の支援策等を活用し有機JAS認定の取得を促進します。
- イ 有機農業により生産される農産物の販路を拡大するため、交流、情報交換の機会を設けるなど有機農業者及び消費者・実需者双方のニーズの把握と需要の拡大に努めます。
- ウ 県内企業等との農商工連携や6次産業化などにより販路の確保を志向する農業者に対し、必要な情報提供を行うとともに、国、県及び民間団体が主催する商談会や各種支援施策の活用を進めます。

## 4 有機農業の推進のための体制づくり

### <推進方向>

有機農業の取組を拡大していくためには、関係者の情報共有や理解の増進を図るとともに、地域ぐるみの取組に発展するよう、市町村、関係団体及び有機農業者と連携して推進体制を整備します。

### <推進施策>

- (1) 県庁内に有機農業を推進するための連絡会議を設置し、関係部署と連携を取りながら本計画を着実に実行していきます。
- (2) 有機農業者や有機農業の推進に取り組む民間団体をはじめ、流通業者、実需者、消費者、農業団体等で構成する推進組織を設置し、本計画に基づく推進方向、推進施策について検討します。
- (3) 市町村に対して必要な情報提供を行うことにより、各地域の有機農業の状況を踏まえ、先進的な有機農業者や農協等と連携し、適切な指導・助言等が行えるよう就農相談窓口を設置するなど、推進体制の整備を働きかけます。

## **V その他必要な事項**

---

### **1 調査の実施**

有機農業の推進に必要な情報を把握するため、有機農業により生産される農産物の生産、流通・販売に関する団体、その他の有機農業の推進に取り組む団体等の協力を得て、必要な調査の実施に努めます。

### **2 有機農業者等の意見の反映**

有機農業の推進に当たっては、有機農業者や関係者及び消費者等の意見や考え方を反映させるよう努めます。

## 参考 データ編

### 1 千葉県における耕地面積の推移

年次	H 1 9	H 2 0	H 2 1	H 2 2	H 2 3	H 2 4	H 2 5	H 2 6
面積 (ha)	130,900	129,900	129,400	128,800	128,100	128,000	127,700	127,300

資料：農林水産統計（耕地及び作付面積統計）

### 2 千葉県における農家数の推移

年次	H 1 7	H 2 2
戸数	81,982	73,716

資料：2005年農林業センサス、2010年世界農林業センサス

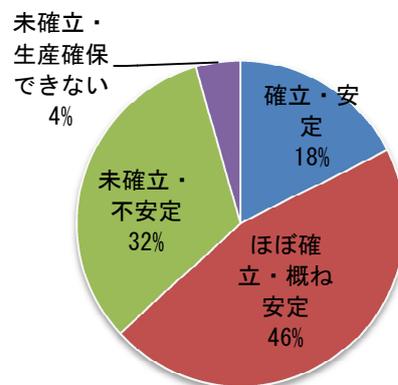
### 3 平成25年度県内の有機農業に関する実態調査結果（回答数126件）

#### （1）栽培技術や生産量について

問 現在のあなたの栽培技術や生産量について、該当する番号を回答欄に記入してください。

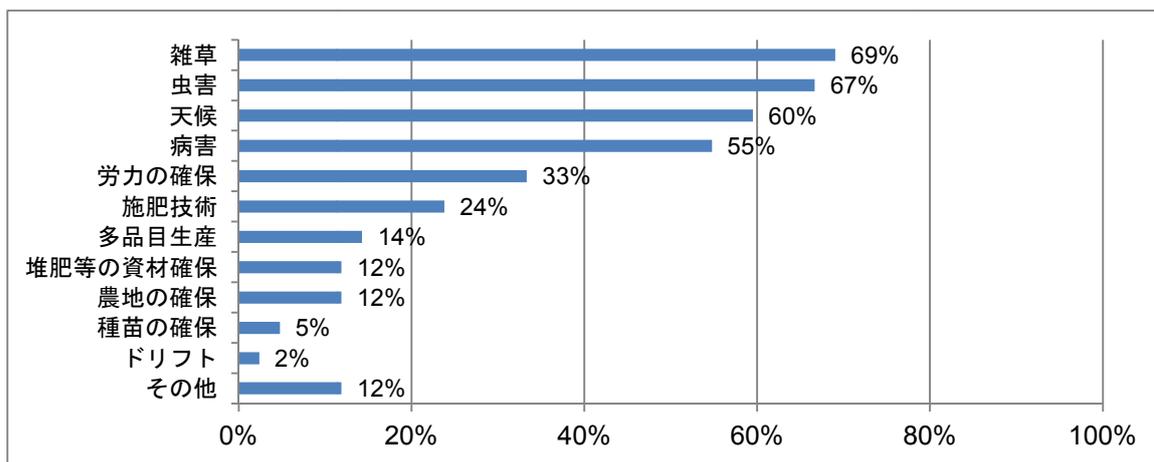
##### 回答項目

- ① 栽培技術が確立し、生産量は安定している。
- ② 栽培技術がほぼ確立し、生産量は概ね安定している。
- ③ 栽培技術が未確立で、生産量は不安定である。  
（品目により大きく変動する。）
- ④ 栽培技術が未確立で、生産量は確保できない。



上記で③、④を回答された方へ

問 技術確立や安定生産を難しくする要因について、割合の高い順に4つ選び番号を回答欄に記入してください。



## (2) 経営収支等について

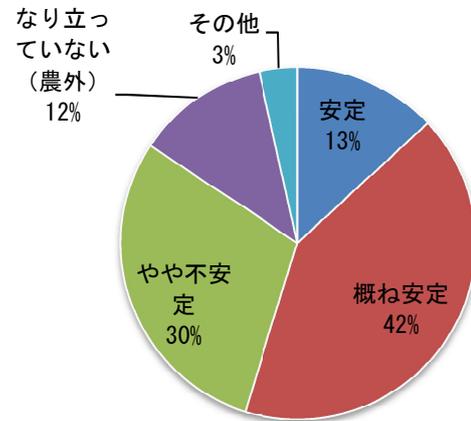
問 経営収支等について、該当する番号を回答欄に記入してください。

※経営の安定とは→ここでは、希望の所得をあげられていることを指すこととします。

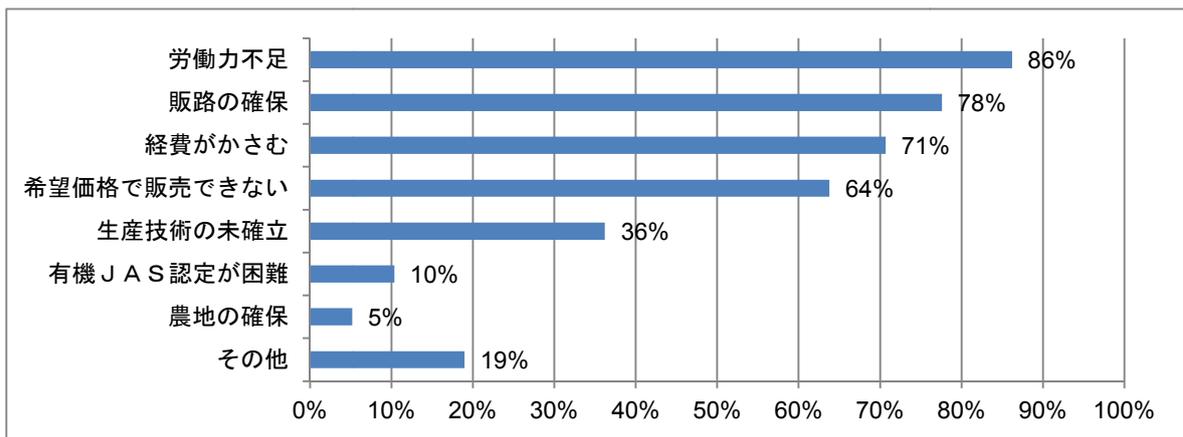
回答項目

- ① 経営は安定している。
- ② 経営は概ね安定している。
- ③ 経営はやや不安定である。
- ④ 経営はなり立っていない（農外収入に頼っている）。
- ⑤ その他（ ）

上記で③、④を回答された方へ

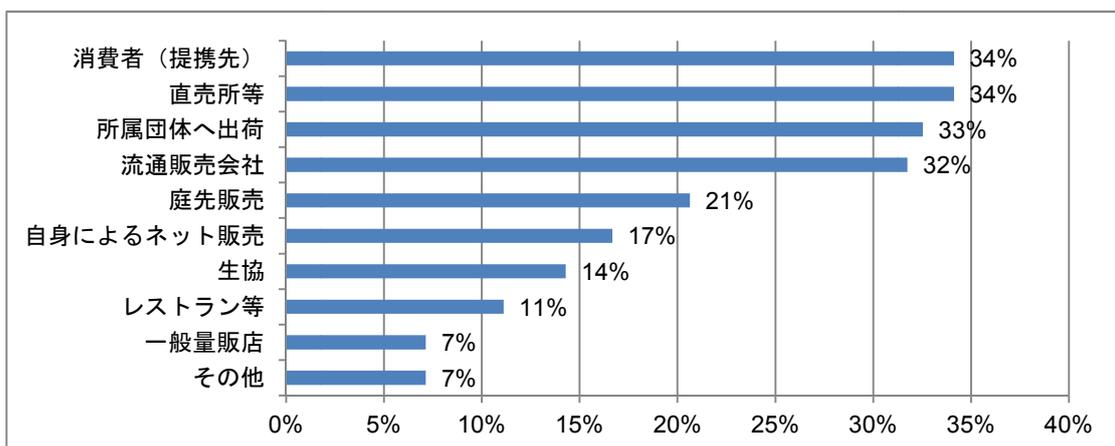


問 経営安定が難しくなる要因について、割合の高い順に3つ選び番号を回答欄に記入してください。



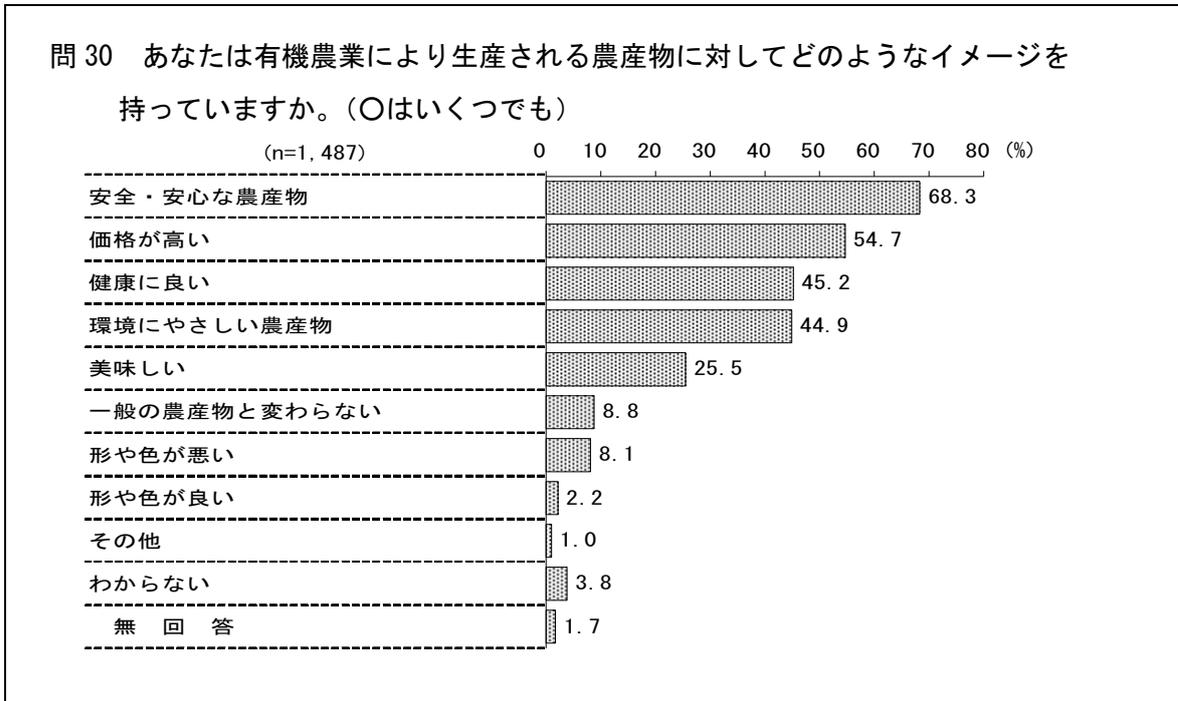
## (3) 販売先について

問 有機農業による農産物の販売先（あなたが直接取引する相手先）について、販売額の高い順に3つ選び番号を回答欄に記入してください。

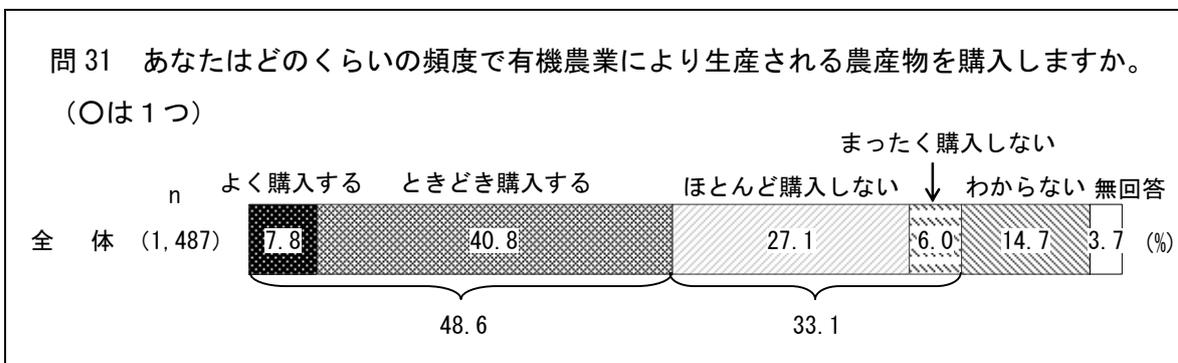


#### 4 第47回県政に関する世論調査結果（平成25年度）

##### （1）有機農業の農産物に対するイメージ



##### （2）有機農業の農産物 購入頻度

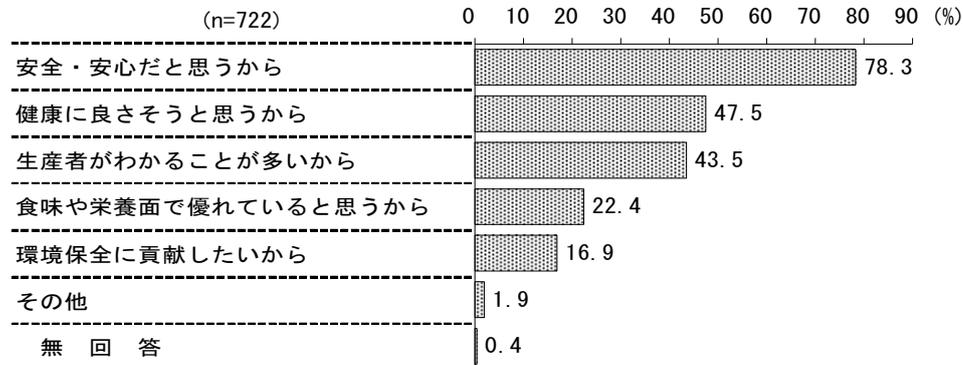


### (3) 有機農業の農産物 購入理由

(問 31 で「よく購入する」「ときどき購入する」とお答えの方に)

問 32 あなたが有機農業により生産される農産物を購入する理由は何ですか。

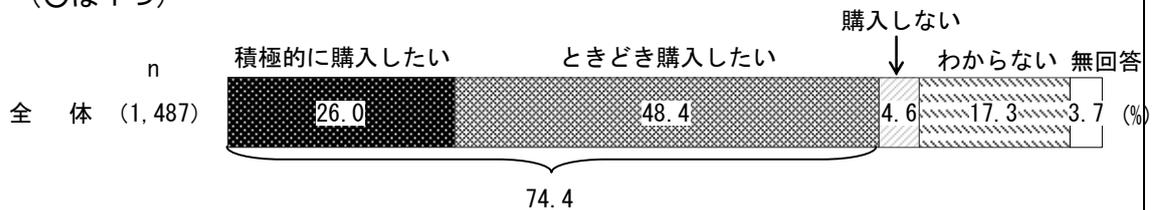
(○はいくつでも)



### (4) 有機農業の農産物 今後の購入意向

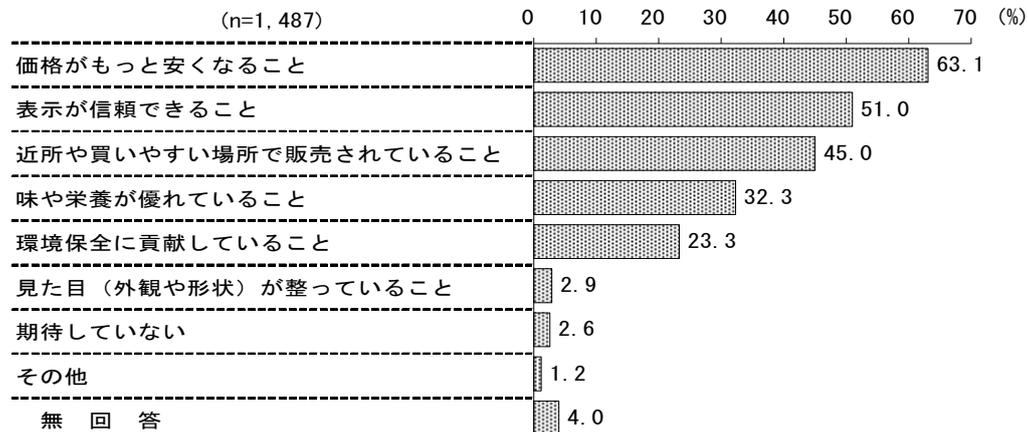
問 33 あなたは、今後、有機農業により生産される農産物を購入したいと思いますか。

(○は1つ)



### (5) 有機農業の農産物に今後期待すること

問 34 あなたは、今後、有機農業により生産される農産物について主に何を期待しますか。(○はいくつでも)



## 参考 資料編

---

### 有機農業の推進に関する法律（平成 18 年 12 月 15 日法律第 112 号）

最終改正：平成 23 年 8 月 30 日法律第 105 号

#### （目的）

第 1 条 この法律は、有機農業の推進に関し、基本理念を定め、並びに国及び地方公共団体の責務を明らかにするとともに、有機農業の推進に関する施策の基本となる事項を定めることにより、有機農業の推進に関する施策を総合的に講じ、もって有機農業の発展を図ることを目的とする。

#### （定義）

第 2 条 この法律において「有機農業」とは、化学的に合成された肥料及び農薬を使用しないこと並びに遺伝子組換え技術を利用しないことを基本として、農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減した農業生産の方法を用いて行われる農業をいう。

#### （基本理念）

第 3 条 有機農業の推進は、農業の持続的な発展及び環境と調和のとれた農業生産の確保が重要であり、有機農業が農業の自然循環機能（農業生産活動が自然界における生物を介する物質の循環に依存し、かつ、これを促進する機能をいう。）を大きく増進し、かつ、農業生産に由来する環境への負荷を低減するものであることにかんがみ、農業者が容易にこれに従事することができるようにすることを旨として、行われなければならない。

2 有機農業の推進は、消費者の食料に対する需要が高度化し、かつ、多様化する中で、消費者の安全かつ良質な農産物に対する需要が増大していることを踏まえ、有機農業がこのような需要に対応した農産物の供給に資するものであることにかんがみ、農業者その他の関係者が積極的に有機農業により生産される農産物の生産、流通又は販売に取り組むことができるようにするとともに、消費者が容易に有機農業により生産される農産物を入手できるようにすることを旨として、行われなければならない。

3 有機農業の推進は、消費者の有機農業及び有機農業により生産される農産物に対する理解の増進が重要であることにかんがみ、有機農業を行う農業者（以下「有機農業者」という。）その他の関係者と消費者との連携の促進を図りながら行われなければならない。

4 有機農業の推進は、農業者その他の関係者の自主性を尊重しつつ、行われなければならない。

#### （国及び地方公共団体の責務）

第 4 条 国及び地方公共団体は、前条に定める基本理念にのっとり、有機農業の推進に関する施策を総合的に策定し、及び実施する責務を有する。

2 国及び地方公共団体は、農業者その他の関係者及び消費者の協力を得つつ有機農業を推進するものとする。

#### （法制上の措置等）

第 5 条 政府は、有機農業の推進に関する施策を実施するため必要な法制上又は財政上の措置その他の措置を講じなければならない。

(基本方針)

第6条 農林水産大臣は、有機農業の推進に関する基本的な方針（以下「基本方針」という。）を定めるものとする。

2 基本方針においては、次の事項を定めるものとする。

- (1) 有機農業の推進に関する基本的な事項
- (2) 有機農業の推進及び普及の目標に関する事項
- (3) 有機農業の推進に関する施策に関する事項
- (4) その他有機農業の推進に関し必要な事項

3 農林水産大臣は、基本方針を定め、又はこれを変更しようとするときは、関係行政機関の長に協議するとともに、食料・農業・農村政策審議会の意見を聴かなければならない。

4 農林水産大臣は、基本方針を定め、又はこれを変更したときは、遅滞なく、これを公表しなければならない。

(推進計画)

第7条 都道府県は、基本方針に即し、有機農業の推進に関する施策についての計画（次項において「推進計画」という。）を定めるよう努めなければならない。

2 都道府県は、推進計画を定め、又はこれを変更したときは、遅滞なく、これを公表するよう努めなければならない。

(有機農業者等の支援)

第8条 国及び地方公共団体は、有機農業者及び有機農業を行おうとする者の支援のために必要な施策を講ずるものとする。

(技術開発等の促進)

第9条 国及び地方公共団体は、有機農業に関する技術の研究開発及びその成果の普及を促進するため、研究施設の整備、研究開発の成果に関する普及指導及び情報の提供その他の必要な施策を講ずるものとする。

(消費者の理解と関心の増進)

第10条 国及び地方公共団体は、有機農業に関する知識の普及及び啓発のための広報活動その他の消費者の有機農業に対する理解と関心を深めるために必要な施策を講ずるものとする。

(有機農業者と消費者の相互理解の増進)

第11条 国及び地方公共団体は、有機農業者と消費者の相互理解の増進のため、有機農業者と消費者との交流の促進その他の必要な施策を講ずるものとする。

(調査の実施)

第12条 国及び地方公共団体は、有機農業の推進に関し必要な調査を実施するものとする。

(国及び地方公共団体以外の者が行う有機農業の推進のための活動の支援)

第13条 国及び地方公共団体は、国及び地方公共団体以外の者が行う有機農業の推進のための活動の支援のために必要な施策を講ずるものとする。

(国の地方公共団体に対する援助)

第 14 条 国は、地方公共団体が行う有機農業の推進に関する施策に関し、必要な指導、助言その他の援助をすることができる。

(有機農業者等の意見の反映)

第 15 条 国及び地方公共団体は、有機農業の推進に関する施策の策定に当たっては、有機農業者その他の関係者及び消費者に対する当該施策について意見を述べる機会の付与その他当該施策にこれらの者の意見を反映させるために必要な措置を講ずるものとする。

附 則 抄

(施行期日)

1 この法律は、公布の日から施行する。

附 則 (平成 23 年 8 月 30 日法律第 105 号) 抄

(施行期日)

第 1 条 この法律は、公布の日から施行する。

(罰則に関する経過措置)

第 81 条 この法律(附則第 1 条各号に掲げる規定にあっては、当該規定。以下この条において同じ。)の施行前にした行為及びこの附則の規定によりなお従前の例によることとされる場合におけるこの法律の施行後にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

(政令への委任)

第 82 条 この附則に規定するもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置(罰則に関する経過措置を含む。)は、政令で定める。

## 有機農業の推進に関する基本的な方針（平成26年4月25日農林水産大臣公表）

### 第1 有機農業の推進に関する基本的な事項

有機農業の推進に関する法律（平成18年法律第112号。以下「有機農業推進法」という。）において、有機農業は農業の自然循環機能を大きく増進し、農業生産に由来する環境への負荷を低減するものであるとされている。

有機農業推進法に基づき平成19年4月に初めて策定・公表された「有機農業の推進に関する基本的な方針」（以下「基本方針」という。）は、我が国の農業における有機農業の役割を明確にするとともに、各種の関連施策を総合的かつ計画的に講じていく基（もと）となった。その結果、我が国における有機農業の取組はわずかながらも増加傾向を示し、有機農業により生産される農産物に対する需要や、新たに有機農業に取り組もうとする者の数も増大しつつある。

こうした傾向を適切に助長することの重要性にかんがみ、農業者その他の関係者及び消費者の協力を得つつ、以下に掲げる事項に基づき、有機農業の推進に関する各種の関連施策を実施するものとする。

#### 1 農業者が有機農業に容易に従事することができるようにするための取組の推進

有機農業は、多くの場合、病虫害の発生等に加え、労働時間や生産コストの大幅な増加を伴うことから、農業者が容易にこれに従事することができるようにすることが重要である。

このため、地域の気象条件・土壌条件等に適合した技術体系を確立・普及するための取組への支援を強化するとともに、有機農業の取組を対象とする各種支援施策を充実し、その積極的な活用を図ることが必要である。

また、先進的な有機農業者による就農相談や研修受入の拡大、新規就農者の経営計画の作成への支援が必要である。

#### 2 農業者その他の関係者が有機農業により生産される農産物の生産、流通又は販売に積極的に取り組むことができるようにするための取組の推進

新たに有機農業に取り組もうとする者が潜在的に相当数見込まれるとともに、有機農業により生産される農産物に対する需要の増加も見込まれることから、有機農業により生産される農産物の生産、流通、販売又は利用の確保・拡大を図っていくことが重要である。

このため、有機農業に関する技術体系の確立・普及や、農業者が有機農業による経営を安定的に行えるよう、有機農業の取組が対象となる各種支援施策の積極的な展開を図ることが必要である。

また、有機農業により生産される農産物の流通、販売又は利用が拡大するよう、有機農業者や農業団体等と、当該農産物の流通業者、販売業者又は実需者その他の業者とが連携・協力することによって、実需者等のニーズに即した広域流通（生産者と消費者・実需者との間に流通業者等の第三者を介在させることによって、主として広域を対象として行われる流通をいう。以下同じ。）や地産地消（国内の地域で生産された農林水産物（食用に供されるものに限る。）をその生産された地域内において消費すること（消費者に販売すること及び加工することを含む。）をいう。以下同じ。）等の地域内流通（流通業者等の第三者を介在させずに、生産者と消費者・実需者が直接取引することにより行われる地域内での流通をいう。以下同じ。）を推進することが重要である。

#### 3 消費者が容易に有機農業により生産される農産物を入手できるようにするための取組の推進

消費者の需要を踏まえ、有機農業により生産される農産物の生産量・流通量を増加させ、当該農産物を消費者が容易に入手できるように多様な販売機会を設けることが重要である。

このため、有機農業により生産される農産物の生産の拡大に努めるとともに、有機農業者、流通業者、販売業者、実需者及び消費者の間で、当該農産物の生産、流通、販売又は消費に関する情報の受発信を支援することが必要である。

さらに、有機農業により生産される農産物の生産及び消費の拡大に伴い、農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律（昭和25年法律第175号。以下「JAS法」という。）に基づく有機農産物等の表示への理解の増進を図るとともに、有機農産物等の適正な表示を確保することにより、消費者の有機農産物等に対する信頼を確保することが必要である。

#### 4 有機農業者その他の関係者と消費者との連携の促進

有機農業の推進に当たっては、有機農業に対する消費者の理解の増進及び信頼の確保が重要であることから、食育、地産地消、産消提携（農業者と消費者とが農産物の取引に係る事前契約（提携）を行い、その契約に基づき農産物を相対で取引する仕組みをいう。以下同じ。）、農業体験学習又は都市農村交流等の取組を通じて、消費者と有機農業者その他の関係者との交流・連携が促進されるよう取り計らうことが必要である。

#### 5 農業者その他の関係者の自主性の尊重

有機農業の推進に当たっては、我が国における有機農業が、これまで、有機農業を志向する一部の農業者その他の関係者の自主的な活動によって支えられてきたことを考慮し、これらの者及び今後有機農業を行おうとする者の意見が十分に反映されるようにすることが重要である。

有機農業に関する基本的な技術の体系化は進んでいるものの、地域に固有な条件への適合が不十分であり、有機農業により生産される農産物の生産の取組は未だ少ない状況にある。こうした状況にかんがみ、有機農業の推進に当たって、地域の実情や農業者その他の関係者の意向への配慮がないままに、これらの者に対し、有機農業により生産される農産物の生産、流通又は販売に係る各種取組が画一的に推進されることのないよう留意する必要がある。

### 第2 有機農業の推進及び普及の目標に関する事項

#### 1 目標の設定の考え方

これまでに、有機農業の推進に係る条件整備については一定の進捗が得られている。今後は、有機農業に従事している農業者に加え、有機農業による就農を希望する者や慣行農業から有機農業への転換を考えている農業者が相当数見込まれることに加え、有機農業により生産される農産物に対する消費者や実需者の需要の増加も見込まれることなどを踏まえ、国及び地方公共団体は、有機農業推進法に定める基本理念に即して、有機農業の一層の拡大を図るよう努めることとする。

このため、国、地方公共団体、農業者、消費者、実需者その他関係者に係る目標を次のとおり定める。

#### 2 有機農業の推進及び普及の目標

##### (1) 有機農業の拡大

新たに有機農業に取り組もうとする者が潜在的に相当数見込まれ、有機農業により生産される農産物に対する需要の増加も見込まれることから、有機農業の一層の拡大を図ることとする。このため、おおむね平成30年度までに、現在0.4%程度と見込まれる我が国の耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合を、倍増（1%）させる。

## (2) 有機農業に関する技術の開発・体系化

有機農業については、基本的な技術の体系化が進捗していることから、今後は、地域の気象や土壌特性等を踏まえ、地域ごとに導入が可能な技術の体系化を進めることが重要である。このため、おおむね平成30年度までに、都道府県において、主要な作物を対象に地域の気象・土壌条件等に適合し、安定的な品質・収量を確保できるよう有機農業の技術体系を確立する。

## (3) 有機農業に関する普及指導の強化

有機農業に関する技術及び知識は、地域の気象・土壌条件等に適合したものであることが重要である。当該技術及び知識の積極的な活用のためには、地域の先進的な有機農業者と連携し、その知見を活用することで、国や地方公共団体による研修をより実践的なものとする必要がある。このため、都道府県は、地域の普及指導センターや試験研究機関等に有機農業に専門的知見のある農業革新支援専門員その他の普及指導員を計画的に配置し、地域の先進的な有機農業者との連携を活用して普及指導活動を強化するなど、有機農業に関する普及指導体制を整備することとし、その整備率を、おおむね平成30年度までに100%とする。

## (4) 有機農業に対する消費者の理解の増進

有機農業に対する消費者の理解を一層増進することとし、有機農業が、化学的に合成された肥料及び農薬を使用しないこと等を基本とし、農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減した農業生産の方法を用いて行われる農業であることや農業の自然循環機能を大きく増進するものであること、また、生物の多様性に及ぼす影響を低減させるための取組であること等を知る消費者の割合について、おおむね平成30年度までに50%以上とする。

## (5) 都道府県等における有機農業の推進体制の強化

基本方針及び有機農業推進法第7条第1項に基づき都道府県が定める有機農業の推進に関する施策についての計画（以下「推進計画」という。）に基づく取組を全国各地において進める。このため、都道府県にあっては、有機農業者や有機農業の推進に取り組む民間団体等をはじめ、流通業者、販売業者、実需者、消費者、行政機関、農業団体等で構成する有機農業の推進を目的とする体制の整備を一層促進することとし、その整備率について、おおむね平成30年度までに100%とする。また、市町村にあっては、各地域の有機農業の状況を踏まえつつ、先進的な有機農業者との連携を有する就農相談先を設けるなどの体制を整備することとし、その整備率について、おおむね平成30年度までに50%以上とする。

## 第3 有機農業の推進に関する施策に関する事項

### 1 有機農業者等の支援

#### (1) 新たに有機農業を行おうとする者の支援

国及び地方公共団体は、関係団体と連携・協力して、有機農業を行おうとする新規就農希望者や慣行農業から有機農業へ転換しようとする者に対して、これらの者が円滑に有機農業を開始できるよう、国及び地方公共団体における就農相談に加え、道府県農業大学校、有機農業の推進に取り組む民間団体等及び先進的な有機農業者による各種研修機会の拡大に努める。また、新規就農者等のための経営計画の作成や就農しようとする青年の研修及び経営の確立までの各種の支援策を活用した支援に努める。

また、国及び地方公共団体は、その職員及び農業団体の職員に対して、有機農業を行おうとする新規就農希望者及び慣行農業から有機農業へ転換しようとする者に対する適切な指導及び助言を行えるよう資質の維持・向上に努める。このため、有機農業者や有機農業の推進に取り組む民間団体等と連携・協力して、例えば、就農相談を受け入れる先進的な有機農業者に関する情報その他必要な情報の提供を行うよう努めるとともに、有機農業の意義や実態、有機農業への

各種支援施策に関する知識及び有機農業に関する技術等を習得させるための研修の実施に努める。

## (2) 有機農業の取組に対する支援

国及び地方公共団体は、有機農業に必要な技術の導入を推進するため、堆肥等の生産・流通施設その他の共同利用機械・施設の整備の支援に努めるとともに、持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律（平成11年法律第110号）第4条第1項の規定に基づく持続性の高い農業生産方式の導入に関する計画（以下「導入計画」という。）の策定を有機農業者等に積極的に働きかけるとともに、導入計画の策定及び実施に必要な指導及び助言に努める。また、特例措置を伴う農業改良資金の貸付け等に関しても、有機農業者の必要に応じた支援に努める。

平成23年度から実施している環境保全型農業直接支援対策の活用により、有機農業者の支援に努める。また、有機農業を核とした地域農業の振興を全国に展開していくため、国は、地域における有機農業の拡大のモデルとなり得る有機農業を核とした地域振興の計画を策定した地域に対し、当該計画の達成に必要な支援に努めるとともに、有機農業者、地方公共団体、農業団体及び有機農業の推進に取り組む民間団体等の協力を得て、地域における有機農業に関する技術の実証及び習得の支援に努める。

特に、有機農業の拡大に当たっては、地域でのまとまった取組が重要であり、また、実需者等のニーズに応えたロットの拡大や産地化の取組も重要となるため、地域ごとの慣行農業からの転換等の取組に対する支援に努める。

国及び都道府県は、先進的な有機農業者や農業団体等と連携・協力して、有機の種子又は苗等の確保を図るための採種技術等の講習や、優良な取組に関する情報の発信に係る取組への支援に努める。

## (3) 有機農業により生産される農産物の流通・販売面の支援

国及び地方公共団体は、有機農業者や農業団体等に対し、消費者や実需者との情報の積極的な受発信を行うよう促すとともに、eコマースの利活用や中食業者、医療・福祉・化粧品業界その他の業界との連携による多様な販路の確保が行われるよう働きかけに努める。また、関係団体と連携・協力して、流通業者、販売業者又は実需者と有機農業者や農業団体等との間で行われる意見交換や商談の場を設定するなど、両者の一層良好な関係の構築の支援に努める。

広域流通の拡大に向け、国及び地方公共団体は、農業団体等と連携・協力して、有機農業者、流通業者、販売業者及び実需者に対し、JAS法に基づく有機農産物の日本農林規格（平成17年10月27日農林水産省告示第1605号）や生産情報公表農産物の日本農林規格（平成17年6月30日農林水産省告示第1163号）等の知識の習得及び制度の活用や、卸売市場における有機農産物等の取扱いの拡大を積極的に働きかけるよう努める。

さらに、国は、有機JAS認証の取得の維持及び拡大を図ることとし、これに係る手続の簡素化等の支援策を検討する。

地域内流通の拡大に向け、国及び地方公共団体は、インショップ（小売施設、空き店舗等に開設された店舗又はコーナーをいう。）や直売所等による取組を支援するとともに、6次産業化の取組及び地場加工業者等と連携した農商工等連携の取組による消費の創出・拡大に向けた支援に努める。

## 2 技術開発等の促進

### (1) 有機農業に関する技術の研究開発の促進

国及び地方公共団体は、互いに協力して、試験研究独立行政法人、都道府県、大学、有機農業者、民間団体等で開発、実践されている様々な技術を探求し、既に取り組まれている有機農業に関する技術の科学的な解明に取り組むよう努めるとともに、これらの技術を有機農業の実態を踏まえ適切に組み合わせること等により、地域の気象・土壌条件等に適合し、品質や収量を安定的に確保できる技術体系を確立するよう努めることとし、併せて、新技術の導入効果や適用条件の把握に向けた実証試験等に取り組むよう努める。

また、国は、有機農業の初期の経営の安定に資するよう、例えば、ほ場環境や土づくりの状態を把握するための土壌微生物相等に着目した科学的指標の策定や、有機農業者が使いやすい土づくり等の技術を組み合わせた技術体系の開発等、有機農業の推進に資する重要な研究課題を設定し、これを推進するよう努める。

地方公共団体は、地域条件に適した有機農業に関する技術の研究開発や、他の地域の試験研究機関等が開発した技術を含む新たな技術を適用するために必要な実証試験等に取り組むよう努める。また、有機農業者等の技術に対するニーズを的確に把握し、それを試験研究機関における試験研究に反映させるよう努める。

## (2) 研究開発の成果の普及の促進

国及び地方公共団体は、地域条件への適合化技術、省エネ技術及び低コスト化や軽労化につながる除草や防除の機械化技術等に関する研究開発の成果情報の提供に努める。

その際、都道府県の普及指導センターを中心に、地域の実情に応じ、試験研究機関、市町村及び農業団体等の地域の関係機関並びに先進的な有機農業者及び民間団体等と連携・協力して、有機農業者への研究開発の成果の普及に努める。また、有機農業者及び有機農業を行おうとする者に対して、研究開発の成果や知見に基づく効果的な指導及び助言が行われることが重要である。このため、国及び地方公共団体は、先進的な有機農業者と連携して、農業革新支援専門員その他の普及指導員等に対して、有機農業に関する研究開発の成果等に係る技術及び知識を習得させるための研修や提供情報の充実に努める。

## 3 消費者の理解と関心の増進

国及び地方公共団体は、有機農業に対する消費者の理解と関心を増進するため、有機農業者と消費者との連携を基本としつつ、インターネットの活用やシンポジウムの開催による情報の受発信、資料の提供、優良な取組を行った有機農業者の顕彰等を通じて、消費者をはじめ、流通業者、販売業者、実需者、学校関係者等に対し、自然循環機能の増進、環境への負荷の低減、生物多様性の保全等の有機農業の有する様々な機能についての知識の普及啓発並びに有機農業により生産される農産物の生産、流通、販売及び消費に関する情報の提供に努める。また、民間団体等による消費者の理解と関心を増進するための自主的な活動を促進するため、優良な取組についての顕彰及び情報の発信に取り組むとともに、JAS法に基づく有機農産物の検査認証制度、特別栽培農産物に係る表示ガイドライン（平成4年10月1日4食流第3889号）に基づく農産物の表示ルール等について、消費者への普及啓発に努める。

## 4 有機農業者と消費者の相互理解の増進

国及び地方公共団体は、有機農業者と消費者の相互理解の増進のため、食育、地産地消、産消提携、農業体験学習又は都市農村交流等の活動と連携して、児童・生徒や都市住民等と有機農業者とが互いに理解を深める取組の推進に努める。

また、民間団体等による有機農業者と消費者の相互理解を増進するための自主的な活動を促進するため、これらの者による優良な取組についての顕彰及び情報の発信に努める。

## 5 調査の実施

国は、有機農業により生産される農産物の生産、流通、販売及び消費の動向等の基礎的な情報、有機農業に関する技術の開発・普及の動向、社会的・経済的効果、地域の農業との連携を含む有機農業に関する取組事例その他の有機農業の推進のために必要な情報を把握するため、地方公共団体及び有機農業の推進に取り組む民間団体等の協力を得て、必要な調査を実施する。

## 6 国及び地方公共団体以外の者が行う有機農業の推進のための活動の支援

国及び地方公共団体は、有機農業の推進に取り組む民間団体等に対し、情報の提供、指導、助言その他の必要な支援を行うとともに、これらの者と連携・協力して有機農業の推進のための活動を効果的に展開できるように、相談窓口を設置する等の所要の体制の整備に努める。

また、これらの民間団体等による自主的な活動を促進するため、優良な取組の顕彰及び情報の発信に努める。

## 7 国の地方公共団体に対する援助

国は、都道府県に対し、基本方針及び当該都道府県における有機農業の実態等を踏まえて定める有機農業の推進の方針、当該方針に基づきおおむね5年の間に実施する施策、有機農業を推進するに当たっての関係機関・団体等との連携・協力、有機農業者等の意見の反映並びに推進状況の把握及び評価の方法を内容とする推進計画のより効果的な実施を働きかけるとともに、必要な情報の提供、指導及び助言に努める。

また、地方公共団体による有機農業の推進に関する施策の策定及び実施に関し、必要な指導及び助言を行うとともに、地方公共団体の職員が有機農業の意義や実態、有機農業の推進に関する施策の体系、有機農業が地域に果たす役割を理解するための先進的な取組事例等有機農業に関する総合的な知識を習得できる研修の実施に努める。

## 第4 その他有機農業の推進に関し必要な事項

### 1 関係機関・団体との連携・協力体制の整備

#### (1) 国及び地方公共団体における組織内の連携体制の整備

有機農業の推進に関する施策は、有機農業により生産される農産物の生産、流通、販売及び消費の各段階において必要な施策を総合的に講じることとされている。これらの施策を計画的かつ一体的に推進し、施策の効果を高めるため、国は、これらの施策を担当する関係機関の連携を確保する体制の整備に努める。

また、地方公共団体に対し、同様の体制を整備するよう働きかける。

#### (1) 有機農業の推進体制の整備

有機農業の推進に当たっては、農業者その他の関係者及び消費者の理解と協力を得るとともに、有機農業者や民間団体等が自主的に有機農業の推進のための活動を展開している中で、これらの者と積極的に連携する取組が重要である。

このため、国は、全国、地方ブロックの各段階において有機農業者や有機農業の推進に自主的に取り組む民間団体等をはじめ、流通業者、販売業者、実需者、消費者、行政機関及び農業団体等で構成する有機農業の推進体制の下、これらの者と連携・協力して、有機農業の推進に取り組むよう努める。

また、地方公共団体に対し、同様の体制を整備するよう働きかける。

国は、地方公共団体、関係団体と連携・協力して、有機農業を行おうとする者の支援や、普及指導員等の相談等に対応するため、有機農業に関するアドバイザーの導入について検討する。

#### (3) 有機農業に関する技術の研究開発の推進体制の整備

有機農業に関する技術の研究開発については、試験研究独立行政法人、都道府県の試験研究機関に加え、有機農業者をはじめとする民間団体等においても自主的な活動が展開されており、これらの民間団体等と積極的に連携・協力することにより、技術の開発が効果的に行われることが期待できる。

このため、国は、全国、地方ブロックの各段階において、試験研究独立行政法人をはじめ、地方公共団体、大学、民間の試験研究機関、有機農業者等の参画を得て、研究開発の計画的かつ効果的な推進のための意見交換、共同研究等の場の設定を図るとともに、関係する研究開発の進捗状況を一元的に把握し、関係者間の情報共有や連携を図りながら、有機農業に関する研究開発の計画的かつ効果的な推進に努める。

また、地方公共団体に対し、同様の体制を整備するよう働きかける。

## 2 有機農業者等の意見の反映

国及び地方公共団体は、有機農業の推進に関する施策の策定に当たっては、意見公募手続の実施、現地調査、有機農業者等との意見交換、会議その他の方法により、有機農業者その他の関係者及び消費者の当該施策についての意見や考え方を積極的に把握し、これらを当該施策に反映させるよう努める。

また、国は、有機農業により生産される農産物の生産、流通、販売及び消費の動向を常に把握し、その状況に応じた施策等の検討を行う体制を整備するとともに、地方公共団体に対し、同様の体制を整備するよう働きかける。

## 3 基本方針の見直し

この基本方針は、有機農業推進法で示された基本理念及び有機農業の推進に関する施策の基本となる事項に従い、基本方針の策定時点での諸情勢に対応して策定したものである。

しかしながら、今後、有機農業を含めた農業を取り巻く情勢も大きく変わることが十分考えられる。また、目標の達成状況や施策の推進状況等によっても、基本方針の見直しが必要となる場合が考えられる。

このため、この基本方針については、平成26年度からおおむね5年間を対象として定めるものとするが、見直しの必要性や時期等を適時適切に検討することとする。

**発行 平成27年1月**

発行者：千葉県（農林水産部安全農業推進課）

〒260-8667 千葉市中央区市場町1-1

電話 043-223-2773

ホームページ

[http://www.pref.chiba.lg.jp/shigoto-sangyou/  
nourinsuisan/nougyou/seisan/index.html](http://www.pref.chiba.lg.jp/shigoto-sangyou/nourinsuisan/nougyou/seisan/index.html)